

名古屋言葉絵葉書の書誌的研究

犬 飼 隆
成 田 道 子

1. はじめに — 「方言絵葉書」の中の「名古屋言葉絵葉書」 —

絵葉書にはさまざまなジャンルがある。観光名所・名産の案内やグリーティングカードの類が想起されるが、かつては、事件、災害、戦争、行事、街頭の光景なども素材となっていた。井上善博(2009)は絵葉書に事件報道とも称すべき部類のものがあ、り、それらは視覚メディアとして新聞をし、のぐ報道性を持っていたと指摘している。

方言も絵葉書の素材の一つとなっている。日高貢一郎(2004)の整理によれば、名所を方言で解説したものほか、さまざまな場面での会話、代表的な方言の例示、その意味用法の説明などのタイプがある。

本稿は、その中から「名古屋言葉絵葉書」を取り上げる。上図(名古屋市博物館所蔵。同館の許可を得て掲載)のような、絵に対応する名古屋方言の会話(独話の例は今のところ唯1例のみ)が描かれた絵葉書である。昭和初期に、ある絵葉書問屋が一連のシリーズとして発行したもので、下校時の会話、道端でのあいさつ、芸子と馴染みの客との会話、料亭での光景、主婦同士のおしゃべりなど、多岐に渡る場面が取り上げられている。日高(2004)の言う「会話展開型」の方言絵葉書に分類され、絵柄と会話文とがともなって場面を説明している。



本稿では、これまでに確認済みの「名古屋言葉絵葉書」36種について、書誌情報の整理を試みる。当該絵葉書群の発行当時の組合せの再現や、発行順、発行年を推定する。

2. 「名古屋言葉絵葉書」の発行動機

「名古屋言葉絵葉書」群は、絵葉書の袋（右図）や宛名面の切手枠内にある菊の印（右下図）により、すべて「菊花堂」（「菊花会」とも）というところから発行されたことがわかる。菊花堂は何のためにこの「名古屋言葉絵葉書」をつくったのだろうか。

発行元である菊花堂は現存しないため詳しいことは不明である。旧菊花堂である株式会社トマツに電話でインタビューを行ったところ、「目録など当時の資料も残っていない。絵葉書も手元にあったものは全てHPに掲載しており、それ以上のことは分からない」とのことであった。

トマツのHPをみると、明治30年代から昭和戦前・戦後の絵図・絵葉書が紹介されている。その内容は、名古屋名所図や名古屋案内地図、当時名古屋で行われた種々の博覧会の記念絵葉書、といったものであり、いずれも名古屋の諸事情に関する内容を掲載しているという点で一貫性がある。



大橋敦夫（2004）は観光文化に占める方言の役割を論じているが、大正から昭和初期にかけて、全国に鉄道が整備され博覧会の類が盛んに催されたときに、各地で方言絵葉書が発行された。一方、全国の学校教育現場で標準語教育がすすめられ、方言の使用をとがめられることによって、反面意識した時代でもあった。本稿で扱う「名古屋言葉絵葉書」群は、各地で方言を題材にした絵葉書が発行されるなか、名古屋における大手絵葉書問屋であった菊花堂がその流れに乗って作成したものであろう。

3. 「名古屋言葉絵葉書」の原作者

これらの絵葉書は、誰が文と絵を手掛けたのであろうか。絵葉書には「みやざき」「MY」「み」「しずひこ」といった署名が一つずつ認められる。文と絵とのそれぞれに付けられてはいないので、署名の主が両方を手掛けたとみるのが素直であろう。



「みやざき」



「MY」



「み」



「しずひこ」

これらの署名の主はそれぞれ別の人物なのだろうか。それぞれの署名ごとに絵を比較してみると（次頁の図参照）、「しずひこ」だけは明らかに作風が異なる。他の3つについては、「MY」と「みやざき」はよく似た雰囲気絵で、同一人物であるように思われる。一方、「み」は、「MY」「みやざき」と比べてやや角が取れたような印象があり幾分雰囲気が異なる。しかし、同一人物が描いた可能性が高いと推定する。

「みやざき」



「MY」



「み」



「しずひこ」



（「みやざき」署名の左側2枚の原画は井上善博氏所蔵。「MY」署名の左側2枚の原画は名古屋市博物館所蔵。それぞれ所蔵者の許可を得て掲載。「み」署名の右側2枚の原画は『尾張乃方言（続編）』より引用）

その根拠となるのは、絵葉書の入っていた袋である。袋には「第一集」などのセット名や「菊花堂発行」という発行元の他に、「みやざき案画」などという作者情報の記載されたものがある。これらの袋に記載された作者情報と署名との組合せは次のようになっている。

署名	作者情報
「みやざき」	宮寄安平作画
「MY」	みやざき作画
「み」	みやざき案画、みやざき案

作者情報の記載のない袋や、袋の無い状態に出てきた絵葉書もあるが、上記の組合せを見る限り、「MY」も「み」も「みやざき」であり、さらにフルネームが「宮寄安平」であったことが読み取れる。これは、「MY」というイニシャル表記とも一致する。このことから、これら3種類の署名はすべて同一人物によるものと考えるのが妥当であろう。

「みやざき」なる人物については、第二集（菊花会発行）の袋裏面に「みやざき氏案畫最新小唄目録」という記載があることから、当時の流行歌に詳しくなると推察される。また、絵葉書の内容は花柳界や風俗界を題材にしたものが目立って多いことから、当時の繁華街であった大須界隈で活動し粋筋の世界に通じた人であった可能性が高い。

一方、「しずひこ」については残念ながら今のところ何も分かっていない。

4. 「名古屋言葉絵葉書」の発行状況について

この節では、「名古屋言葉絵葉書」がどのような組合せで、また、どのような順番で発行されたのかを考察する。

現在確認済みの「名古屋言葉絵葉書」の内訳を以下に一覧する。全部で79点を確認しているが、同一のものがあって36種となる。同一のものが複数確認される場合もある。また、絵葉書の入っていた袋は9点7種を確認している。

- ・名古屋市博物館所蔵……………9点（9種）
- ・井上善博氏所蔵……………13点（13種）
- ・個人所蔵……………28点（17種）
- ・成田道子所蔵……………14点（14種）
- ・東北芸術工科大学東北文化研究センター所蔵……2点（2種）
- ・『尾張乃方言（続編）』所収……………13点（4種）

最後にあげた『尾張乃方言（続編）』とは、昭和7年に加賀治雄氏の編集により土俗趣味社から200部限定で刊行された方言辞典である。それぞれ表紙から数ページめくったところに「名古屋言葉絵葉書」の実物が貼り付けられている。愛知県内の公立図書館や全国の大学図書館に所蔵されている同書を、複写物の取寄せを含めて、現在までに15点確認した。うち2点には絵葉書が付いておらず、紛失したものと思われる。

4. 1. 発行時の組合せを復元する判断基準

確認された36種の絵葉書について、発行時の組合せと発行順を整理するにあたり、①絵葉書に振られた番号、②題の囲み方、③署名、④存在が確認された状況の4点を主な判断基準としていく。

以下に、①～④がどのように判断要因となり得るかを述べる。

①絵葉書に振られた番号

一部の絵葉書には「No. 1」「No. 2」「No. 3」「No. 4」「1」「2」「3」「4」といった番号の付されたものがある。他の条件が一致し、且つ、このような番号が振られていれば、それらはもとは一つの組であった可能性が高い。実際のところ、この絵葉書群は番号の振られていないものの方が圧倒的に多く、なかでも「No. 1」「No. 2」「No. 3」「No. 4」と記載のあるものは1枚ずつしかないため、番号の記されているものについては、それだけでも組合せを再現することが可能となることがある。

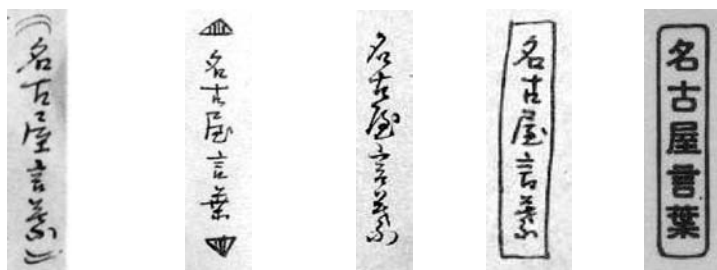
なお、これらの番号の最大値が4であることや、一つの袋に入っている絵葉書が多くて4枚であることから、この絵葉書群が4枚1組で発行されたものであると推定できる。

②題の囲み方（枠）

それぞれの絵葉書には、記されている言葉が名古屋方言であることを表すために「名古屋言葉」という題が付けられている。この題には、《名古屋言葉》、◀名古屋言葉▶、名古屋言葉というように、カッコや枠が施されている場合がある。

これらの違いが生じた理由は不明であるが、一つのセットとなるものを作る際には、統一した形式を用いたであろう。したがって、同時期に作られたものであれば、言い換えると、もともと同じ組であったならば、題の囲み方も同じ形式でなされているものと考えることができる。

なお、名古屋言葉bのように手書きでなく活字のものもあるが、こちらはすべて「しずひこ」によるものである。「しずひこ」署名の絵葉書は「MY」「みやざき」「み」の署名のあるものとは明らかに別であり、組合せを整理するにあたっては始めから区別して扱う。



《名古屋言葉》 ◀名古屋言葉▶ 名古屋言葉 名古屋言葉 名古屋言葉b

③署名

「名古屋言葉絵葉書」に「MY」「みやざき」「み」「しずひこ」という4タイ

プの署名があることは、すでに述べた。この署名の別も、②の題の囲み方で述べたのと同様の理由により、組合せや制作順を特定するための要素となる。

④存在が確認された状況

今までに36種の絵葉書の存在を確認した先は以下の6つである。

- ・名古屋市博物館所蔵
- ・井上善博氏所蔵
- ・（井上、成田以外の）個人所蔵
- ・成田道子所蔵
- ・東北芸術工科大学東北文化研究センター所蔵
- ・『尾張乃方言（続編）』所収

これらを、組み合わせと存在確認状況の情報を加えて、さらに次のAからOまでに分類する。

- A：名古屋市博物館所蔵
- B：井上善博氏所蔵（個々）
- C：井上善博氏所蔵（第壱輯）
- D：個人所蔵（第二集a）
- E：個人所蔵（第四集）
- F：個人所蔵（第三輯）
- G：個人所蔵（第壱輯）
- H：個人所蔵（第貳輯）
- I：個人所蔵（個々）
- J：成田道子所蔵（第壱編）
- K：成田道子所蔵（第二集b）
- L：成田道子所蔵（第壱輯）
- M：成田道子所蔵（個々）

N：東北芸術工科大学東北文化研究センター所蔵

O：『尾張乃方言』（続編）所収

カッコ内に“第壱輯”等とあるのは、その絵葉書の存在が確認された当時（現在の所蔵者の入手当時）に、入っていた袋に記載されていたものである。“個々”としたのは、袋の無い状態でまとめて確認されたものであることを示す。もちろん、確認時の状態が発行時の状態と同じであるとは限らない。後に述べるとおり、かつての持ち主が組み替えた状態で袋に入れていたと考えられるものがあり、他のものについてもその可能性は払拭できない。しかし、検討の材料にはなるだろう。

なお、上の表で第二集に a と b とがあるが、これは袋のデザインおよび発行元が異なる（a には菊花堂発行、b には菊花会発行とある）ため、別の組として区別した。

以上が、36 種の絵葉書のもとの組合せや発行順を考える際の判断基準である。このほか、絵葉書はそれぞれ青や茶色などの単色刷りで印刷されており、一つの組における色の組合せなども有効な判断基準となるかもしれないが、全てを实見したわけではないので、今回は判断材料から除外した。

4.2. 組合せの復元

以上の判断基準によって、発行当時の絵葉書の組合せを推定したのが後掲の表である。以下、整理 No. の順にこの表を説明する。この整理 No. は、本稿において便宜上付したものである。

表の“絵葉書の内容”の欄に (1) (2) とあるものは、書かれている文がほぼ同じ内容だが絵柄が異なることを示す。このような組合せは 36 種の絵葉書の中に 10 対ある（例として次頁の図 2 点を参照）。署名が異なるので、同じ絵柄による再発行と推定する。以下これを仮に“焼き直し”と呼ぶ。



（右側は名古屋市博物館所蔵。同館の許可を得て掲載）

なお、No.19とNo.35に同じ題材（名古屋甚句）が描かれているが、これは、一方から一方への“焼き直し”でなく別物とみなす。それぞれの属している組（No.18～20とNo.33～36）には4枚で1つの話しになっているという点で共通性があり、場面も似ているが、ストーリーや会話の内容は違いがあり原作者が異なるからである。

No.1～4

署名が「みやぎき」となっているのはこの4種のみであり、いずれも題の名古屋言葉にカッコや枠がついていない。この4種は、確認されたときセットの状態ではなかったが、No.3、4と一緒に「第壱編」の袋に入って確認されたNo.10、12が、後述するように第二集aのものと同定されることから、No.3、4を含むこの組が「第壱編」であったと考える。

名古屋言葉絵葉書の書誌的研究

整理 No	絵葉書の内容	番号	題の 枠	署名	確認状況	袋
1	大工二人の会話 (1)		ナシ	みやざき	B	第壹編 菊花堂 宮崎安平 作画
2	八百屋の口上 (1)		ナシ	みやざき	B	
3	前日の客について話す芸子二人 (1)		ナシ	みやざき	J	
4	女の子とおばさんにあたる婦人 (1)		ナシ	みやざき	J	
5	お座敷での女中と男性客		(())	MY	B	?
6	カフェ店内、女給となじみ客 (1)	No.1	(())	MY	A	?
7	店先での女将となじみ男性客 (1)	No.2	(())	MY	A, B	
8	女学生二人 (1)	No.3	(())	MY	A	
9	電車通りで出会った婦人二人 (1)	No.4	(())	MY	A, B	
10	洗濯中の女性によるうわさ話		▲▼	MY	D, J	第二集 a 菊花堂 みやざき 作画
11	夫婦喧嘩		▲▼	MY	D, N	
12	芸子と女将との電話による会話 (1)		▲▼	MY	D, J	
13	芝居を話題にした男女二人 (1)		▲▼	MY	D	
14	御隠居と熊さんという男性		ナシ	み	A, B, K	第二集 b 菊花会 みやざき 案画
15	年配婦人二人		ナシ	み	A, B, K	
16	芸子と女将との電話による会話 (2)		ナシ	み	A	
17	芝居を話題にした男女二人 (2)		ナシ	み	A, B, I, K	
18	町で会った客と女性 (芸子)	1	□	み	M	第三集か? (1枚欠)
19	名古屋甚句	3	□	み	M	
20	お座敷から帰る客と女性 (芸子)	4	□	み	M	
21	大工二人の会話 (2)		□	み	E, I, O	第四集 菊花会 みやざき 案
22	八百屋の口上 (2)		□	み	E, I, O	
23	前日の客について話す芸子二人 (2)		□	み	B, E, I, O	
24	女の子とおばさんにあたる婦人 (2)		□	み	A, E, I, O	
25	カフェ店内、女給となじみ客 (2)		□	み	F, I	第三輯 菊花会
26	店先での女将となじみ男性客 (2)		□	み	F, I	
27	女学生二人 (2)		□	み	F, I	
28	電車通りで出会った婦人二人 (2)		□	み	F, N	
29	バスを待合せて			しずひこ	C, L	第壹輯 菊花会 しずひこ 画
30	八百屋の買物			しずひこ	C, L	
31	広ブラの婦人			しずひこ	C, L	
32	街路で友人に会う			しずひこ	C, L	
33	洋之助と静子との電話での会話	1		しずひこ	G, H	第貳輯 菊花会
34	洋之助の来店	2		しずひこ	G, H	
35	名古屋甚句	3		しずひこ	G, H	
36	お座敷から帰る洋之助	4		しずひこ	G, H	

No. 5

題が《名古屋言葉》で、「MY」の署名が認められるという点は次のNo. 6～9と共通している。しかし、No. 6～9のところでも述べるようにこれには「No. 1」「No. 2」などの番号が付いておらず、別の組のものと考えられる。現在確認した36種の中にこのツレと考えられる絵葉書は見当たらない。

No. 6～9

先に「①絵葉書に振られた番号」の説明でも触れたが、「No. 1」「No. 2」「No. 3」「No. 4」という番号の振られているものは、36種中この4種のみである。また、これらはいずれも題が《名古屋言葉》となっており、同時に「MY」の署名が認められるという共通性がある。これらのことから、この4種はもとは同じ組であったと考える。

No. 10～13

題が◀名古屋言葉▶となっているのはこの4種のみである。また、署名もすべて「MY」で共通しており、「第二集 a」の袋に入った状態で確認されていることから、この4種は同じ組のものであったと考える。

なお、No. 10, 12には、No. 3, 4とともに「第壱編」の袋に入った状態で確認されたものもあるが、題に付けられたカッコや署名の共通性からみて、もとの持ち主が組み替えた状態で袋に入れたと思われる。

No. 14～17

題の名古屋言葉にカッコや枠がついていなくて、署名が「み」となっているのは、この4種のみである。また、このうちNo. 14, 15, 17の3種は「第二集 b」の袋に入った状態で確認されている。

なお、この組のうち、No. 16, 17はNo. 12, 13と内容が同じで“焼き直し”とみなされるが、No. 14, 15はNo. 10, 11とそれぞれ異なった内容が描かれている。

No. 18 ~ 20

題が名古屋言葉となっていて、署名が「み」となっているものは11種あるが、その中で番号が振られているのはこの3種のみである。また記された番号の順に絵葉書をみていくと、芸子が町で馴染みの客に偶然出会い、久しぶりに会ったから一緒にどこかへ行こうという話になり（No. 18）、座敷に上がった芸子が客に名古屋甚句を披露してみせ（No. 19）、男性の帰り際に芸子が人力車を呼ぶ（No. 20）、というように、一つのストーリーになるようにつくられている。No. 18とNo. 19の間に位置するはずの「2」という番号の記されたものが欠けているが、2人がどこかに遊びに行っている最中の様子、あるいは座敷に上がったときの挨拶のような会話が記されていたのではないかと推察する。

No. 21 ~ 24

この4種はNo. 10 ~ 13と同じ内容の“焼き直し”である。『尾張乃方言（続編）』に貼り付けられていた絵葉書は、いずれもこの4種のうちのどれかであった。さらに「第四集」の袋に入った状態でも確認されており、この4種が同じ組であったことがわかる。

No. 25 ~ 28

題が名古屋言葉で、署名が「み」となっているものは11種あるが、そのうち7種についてはすでもとの組が推定できていること、またこの4種がまとめて「第三輯」の袋に入っていたことから、これらが同じ組であったと推定する。

なお、この4種はNo. 6 ~ 9の組と同じ内容の“焼き直し”である。

No. 29 ~ 32

「しずひこ」作のものは8種類が各2点ずつある。No. 29 ~ 32とNo. 33 ~ 36のセットとしてそれぞれ袋に入った状態で確認されたが、No. 29 ~ 32は2つのセットとも「第壱輯」の袋に入っていた。これは原形を保っているものと考えて問題ないであろう。

No. 33 ～ 36

この4種は「第壺輯」の袋に入っていたものと「第弐輯」の袋に入っていたものとの2セットが確認されている。No. 29～32が2セットとも「第壺輯」の袋に入っていたことから、No. 33～36で「第壺輯」の袋に入っていたものはもとの持ち主が袋を違えてしまったものと推察する。本来は「第弐輯」であつただろう。

4. 3. 発行順の推定

絵葉書の組合せを復元したところで、その発行順の推定を行う。ここでは、絵葉書の入っていた袋に記載されている情報も参照していく。

絵葉書の入っていた袋には、「第壺編」「第三輯」などのセットの名称、「菊花堂発行」あるいは「菊花会発行」という発行元の情報、そして、ものによっては「みやざき案画」「しずひこ画」といった作者情報も記されている。

まず、絵葉書36種を大きく3つに分ける。一つは署名「みやざき」または「MY」のグループ（No. 1～13）、もう一つは「み」のグループ（No. 14～28）、そして「しずひこ」のグループ（No. 29～36）である。このように分けることで、「みやざき」「MY」－「み」間に、同一内容の絵柄違い（1）－（2）という対立（これまでに“焼き直し”と呼んだ現象）を見ることができる。2つのグループのうちどちらが先に出版されたのかについては、これに即してa b 2つの「第二集」を比較することが手がかりになる。

「第二集 a」（No. 10～13）と「第二集 b」（No. 14～17）とでは、それぞれのうち2枚は内容が同じで絵柄違いであるが、他の2枚には全く異なる内容が描かれている。具体的には、「第二集 a」のNo. 10では井戸端会議で近所のおばさんの不評判を噂する様子、No. 11では訳のわからないことを言って怒る夫を疎ましく感じている妻が描かれ、「第二集 b」のNo. 14では日頃仕事に忙しい熊さんが久々の休みに御隠居を訪ねたときの会話、No. 15では奥さん2人が女の子の着物への執着に親としての心情を述べる様子が描かれている。この2つの組の他では、同じ内容の題材がある場合、組のすべて4枚ともが“焼き直し”されているのに対し、「第二集」のaとbとでは半分が題材も新たに書き直さ

れている。その理由はわからないが、一つの推測を述べるなら、No.10「陰口」No.11「夫婦喧嘩」という負の感情の会話を、心の温まるものに差し替えたのかもしれない。とすれば、aが先、bが後であろう。

また、a「菊花堂」b「菊花会」という発行元の名称については、本来「菊花堂」であるところ、時に「菊花会」とも称したという背景があるとすれば、先行する組の袋に「菊花堂」という名称が使われるのが妥当であろう。とすれば、やはりaが先、bが後になる。このようにして、署名「みやざき」または「MY」のグループ（No.1～13）の方が、「み」または「しずひこ」のグループ（No.14～36）に先行して作られたと推定する。

では、そのなかでそれぞれの組の発行順はどう考えられるのだろうか。a b 2つの「第二集」が連続して発行されたものとする、前半の最後に「第二集 a」（No.10～13）、その前に、それと署名「MY」を同じくする袋なしNo.6～9の組、1枚だけ孤立しているNo.5 がきて、「みやざき」の署名のある「第壺編」（No.1～4）が最初に発行されたと推定できよう。なお、No.5～9の前後関係を確定する根拠は今のところ得られていない。この推定は仮のものである。

続いて後半、“集”のグループについては、「第二集 b」（No.14～17）と「第四集」（No.21～24）はあるが、間に位置する「第三集」は袋が見つからない。No.18～20の組をそこにはめ込むことは大いに可能であろうが、「第五集」が存在した可能性も払拭できないので、絶対ではない。

そして最後に、第壺から第三までの“輯”がその数字順に並べられる。「しずひこ」作のものがNo.25～28の「み」署名よりも先に出たようにみえるが、あるいは、これら“輯”のグループは順に発行されたというよりも、（ほぼ）同時に発行されたもので、単純にそれらを区別するための記号として数字が当てられていた、という可能性も考えられる。第壺、二輯の作者が異なる理由はわからない。

以上のように絵葉書の組合せの復元と発行順の推定を整理したものが、前掲の表である。

こうしてみると、カッコや枠のついていない「名古屋言葉」という題は2組あるが、その片方は当該絵葉書群全体の始めの1セットであり、他方は、“焼

き直し”群の始めの1セットだったことがわかる。

発行順の経緯は、最初は題の枠もなく、署名もごく単純に「みやざき」としていたものを、次は《名古屋言葉》や◀名古屋言葉▶というように飾り方にこだわり、署名もイニシャル表記を使うように変えていったのかもしれない。そして、“焼き直し”が始まると、題は一度枠なしに戻るが、以降名古屋言葉で統一され、署名も「み」で一本化された、とみることができよう。

4.4. 発行時期

以下、井上（2009）の調査に従いながら若干の見解を付け加えて述べる。昭和6年2月11日の新聞「新愛知」には名古屋城一般公開に関する記事があり、その一角に、絵葉書の老舗である菊花堂がこれを記念して「名古屋城観光記念絵はがき」を発売する旨の文章がある。ここではまた、菊花堂の発行している絵葉書をいくつか紹介しており、「菊花堂にはこの外名古屋特有の方言を集めた「名古屋ことば」全集の絵はがきあり、」という一文とともに、「カフェー」と「女学生」の題の2つの絵葉書について、そこに記された会話を載せている。



（名古屋市立鶴舞図書館所蔵マイクロフィルムによる。同館の許可を得て掲載）

何から何まで一揃ひ／きれいな名城公開の記念絵はがき／菊花堂で発売名古屋ばかりでなく、日本否外国へも菊花堂ピクチャで有名な、名古屋市広小路明治銀行前の、絵はがきの権威老舗菊花堂では、今日から一般に公開された名古屋城観光記念絵はがきを発売すること、なり既に製品は市

内の小売店を初め全国の取引先や欧米の関係業者先へどし、どし、発送中であるが、……………菊花堂は今回の記念絵はがきの外に数十種の名古屋名所絵葉書あり、いづれも名古屋観光の好記念品として好評を博してゐるが……………菊花堂にはこの外名古屋特有の方言を集めた「名古屋ことば」全集の絵はがきあり。……

名古屋言葉（カフェー）

（その一）菊花堂絵はがきから

甲 お出ヤース、アレシー様、どうシヤータナモー

乙 どうもシーセンがヨーおまさんテヤ此頃一寸ともみいセンナー

甲 ウソわしヨー在所の方へ行つて来たもんだでヨー、一週間程休んだウワエモー

乙 見合にイキヤーシタカ

甲 イヤラシイー事言つてチョースナわしそんな事知らんウワエーモ

乙 それでもわしテヤー聞ひたギヤー

名古屋言葉（女学生）

（その二）菊花堂絵はがきから

甲 原山さん、今度イリヤータ平山先生テヤヨー、イッジが悪ひぜーわしキッツきらい

乙 ソーキヤイ前の河合先生テヤ良かったナー

甲 わし清水先生もすき内のニー様となかが、いひはナー内へはヘットに、いりヤーセンガヨーたまにはござるぜー

乙 草場先生もヨーいひがあの方はナーひいき、ゝが有つて、いかんわナー

（現行の字体に直すにあたり、表記を改めたところがある）

「カフェー」と「女学生」の絵葉書は、同じ内容のものが2つ発行されているが（No.6 とNo.25、No.8 とNo.27）、語句が全く同じというわけではない。両者

の細かな違いを観察すると、この記事で紹介されている会話文は後から発行されたもの（No.25とNo.27／第三輯）であることが分かる。たとえばNo.6は「お出ヤース、アレ、静岡様どうシヤータエモ」で始まり「わしテヤー、聞ひたギヤー」の後に「マーいひで何か持って来てチョー」という語句がある。

「第三輯」は、現在確認している「名古屋言葉絵葉書」の中でも終盤、おそらくは最も遅くに発行されたと考えられる。新聞記事で紹介されている絵葉書が、掲載当時すでに発行済みであったならば、昭和6年2月11日の時点で、現在確認済みの絵葉書36種の発行が完了していたということになる。「名古屋ことば」全集の絵はがきあり」ということばのニュアンスからは、発行済みと捉えるのが素直であろう。

また、「第壱輯」の絵柄に市バスの停車標識が描かれている。名古屋市バスが営業を開始したのは昭和5年である。

そして、この絵葉書群には“編”“集”“輯”という3つのグループがある。これらの絵葉書はそれぞれの組が完全に等間隔の期間において、あるいは、全種をいっせいに発売したのではないと考えるのが妥当であろう。つまり、まず“編”のグループを同時に、あるいは一定期間内に連続して発行し、その後しばらくしてから“集”のグループ、さらに“輯”のグループが順次発行されたと考えるのが良いように思う。一つのグループが出てから次のものが出るまでには、それ相応の時間がかかるはずである。

以上によれば、これらの絵葉書は昭和5年から6年（1930～1）にまとめて発行された可能性が高い。

5. おわりに

以上、「名古屋言葉絵葉書」の書誌について、いくつかの角度から考察を行った。発行された「名古屋言葉絵葉書」のすべてが確認されているわけではないが、概観がつかめる程度の数が集まったため本稿の形でまとめた。新たに当該シリーズの絵葉書が発見されれば、再整理が必要になるであろう。この考察はあくまで既知の資料に依拠して成り立っている。すでに述べたとおり、絵葉書の整理Noも仮に付したものである。

また、本稿では絵葉書の発行に関する書誌のみを考察の対象とし、記されている言葉、あるいは描かれている絵柄から読み取れることにはほとんど触れていない。それについては別稿に譲るが、発行より以前の状況を反映しているふしがあることを指摘しておきたい。たとえば冒頭にかかげた女学生の下校風景は派手な洋装の一人を除いて袴姿であるが、昭和5年にはすでにセーラー服の着用が定着している。

引用参考文献

日高貢一郎（2004）

「方言絵はがき」の研究（1）」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』2004.4

大橋敦夫（2004）

「方言と観光文化—方言絵はがきの考察を中心に—」『観光文化研究所所報』2004.3

井上善博（2009）

『名古屋絵はがき物語—二十世紀のニューメディアは何を伝えたか—』（風媒社）
2009.4

本稿は完全共著である。文中に掲載した図版のうち注記した以外の絵葉書と袋はすべて成田道子が所蔵している。